

クモの会会報から再録 1

ハエトリグモの生態観察の記録

池 田 博 明

「クモの会」は代表を佐藤幸子氏が、事務局を藤井悦子氏（～1983年）・日下部光代氏（1984年～）が務めた、1978年にクモの野外観察を主体として発足した会である。東京近辺の同好の士を集めて不定期に観察会を行い、孔版印刷の会報を出していた。1990年の名簿には29名が登録されている。私が入会したのは1983年5月である。

東京蜘蛛談話会とは別に観察会を開催し、運営も別であった。クモの会の会報（会誌）は、1979年1月1日発行の「クモの世界」第1号から、1991年12月1日発行の「トタテズグモ」第36号までを、私は保管している。会報名は1979年の隔月発行の「クモの世界」第1号が第6号まで、1980年4月からは「遊糸原（ゆうしげん）」となって1号から1981年4月の7号まで、1981年5月5日からは「トタテズグモ OPEN-DOOR SPIDERS」となって続いた。会報名の通り、規則なし、会員の自主性のみが頼りという会であった。

会報には東京クモ談話会の通信のような性格と会誌のような性格があった。クモの会では会誌と命名されていたが、製本されておらず雑誌の形態になっていないので、ここでは会報と呼ばせていただくが、これは決して軽んじているからではない。編集者は藤井悦子氏（1979年）、日下部光代氏（1980年）、藤井悦子氏（1981～1983年）、日下部光代氏（1983年1984年）、浅間 茂氏（1985年のNo.23のみ）、牧 孝匡氏（1985年～1987年、1991年）、森 充氏（1988年～1990年）と代わった。

会報にはときどき会員の卓抜な観察記録や生態記事が掲載された。ただし、手書きの会報は資料としての価値を低めかねない。そこで、私が価値ありと判断した記事を本会誌に再掲していきたいと思う。

第1回目として私が関心を持っているハエトリグモの生態記録をひろい出してみたい。

アオオビハエトリの威嚇誇示行動 藤井悦子

1979年6月2日、2匹のアオオビハエトリが60cm離れて横歩き。腹部を高く

突き上げたまま前肢を大きく開いては震わせ、折り畳んでは胸元を押さえる。互いに視界から外さぬよう横歩きは不規則なジグザグ曲線を描く。そうして近づけば近づくほど、急いで近づくようになり、双方のジグザグ歩行線が一致するやいなや、開いた前肢と前肢を重ね合わせる。約4秒、2匹は静止した。5秒め、1匹が60cm走り離れ更に姿を隠す。残された1匹も物陰へ。 どうしだったのだ。

(クモの世界第4号, 1979年7月7日発行. 5頁より)

[コメント]アオオビハエトリの威嚇誇示行動で組みあいまで進んだ例, 双方のオスの力は互角だったようです。(池田)

ネコハエトリ 5月は恋の季節 佐藤幸子

1979年5月4日夕方, 家庭菜園のエンドウ豆を取っていてヨイショと痛い腰を伸ばした途端, 柿の葉の上でチャカチャカ動くものを認めました。ものすごく大きなネコハエトリが向い合って二匹, 右手をあげたり左手をあげたり, すっかり意気投合といった形で3cm以上は決して離れずに, 楽しいデートを続けていました。それに長い間みとれながら, 柿の葉はクモのダンスホールに適当な大きさだなとつくづく思いました。

5月5日昼, また柿の木を見上げました。やっぱりネコハエトリ(雌)がいて成体でたくましい恰好をしているのに, 昨日のクモと比べると小さいのです。それが葉先からツツとぶら下がったり, すぐもどって葉の上をそわそわ歩き回ったり, ちっとも落ち着きません。素早くあたりを探しますと, 30cmうしろに1匹, 20cm左に1匹と, 同じ位小さなハエトリグモ(雄)がいたのです。その左の雄がぱっと隣の葉に移って来ました。でも彼女はどうしてもぶら下がりがたくて, それから三回ぶら下がりました。彼はいつまでもじっと待ちました。

雌は糸を流してテラス(葉のこと)の屋根に移って来ました。すると雄は雌を追って雌の座していた所にピタリとすわりました。そんな事とはつゆ知らない雌はどんどん歩いて50cm以上も離れてしまいました。でも雄はじっと待ちます。うろろろしていた雌も再び戻ってきて, テラスの端にとりつき顔を上げました。雌雄お互いの目の間に火花が散りました。

「お母さん, お昼まだあ?」の声に人間の母親は家の台所に行かなくてはなりませんでした。

食後, 先刻の場所に走って行って見ましたら, もう誰もいませんでした。けれど大きいたくましい個体はそれと同じ大きさの相手を, 小さく成体になっていれば, それと同じ成体が相手を見つけてやってくる・・・自然の素晴らしさをしみじみと感じた次第です。

(クモの世界第4号, 1979年7月7日発行. 5頁より)

[コメント]ハエトリグモの求愛方法には求婚ダンスのほかに小屋がけ求婚(斎藤慎一郎の提唱した用語)があります。最終脱皮前の亜成体メスの住居の傍にオス

が陣取って小屋がけをして待ち、脱皮したメスに触覚的な合図を送り、交尾してしまうものです。オープンな場所での求婚がどの程度実際の効果があるものなのかは確認されていません。また大きい個体どうし、小さい個体どうしといった交配を同系交配といいます。これもきちんと確認されていません。(池田)

マミジロハエトリの産卵観察 日下部光代

1979年6月10日、八王子城址で腹部の大きいクモ(雌)を採集、交尾時期が不明なので採集以前に既に産卵しているかもしれないが、とにかく観察してみる。

《第1回産卵》

6月14日、管ビンの中に入れておいたコゴメウツギの葉を2枚つづり合わせ中に白い糸の布団でくるんだ径5mm位の卵のうを作る。親は一緒に中に入って外には出てこない。

6月18日、親が巣から出てくる。採集以来、今日までエサは食べていない。

7月1~2日、分散。分散数不明(卵の殻、脱皮殻から推定20匹くらい)

《第2回産卵》

産卵日不明。

7月26~31日分散。分散数25匹。卵殻数と脱皮殻、分散した子グモの数が一致しないが、数え方が不正確なのだろうか。

《第3回産卵》 8月1日

8月18日~20日。分散。分散数11匹。

子グモは分散の二日前から卵のうの外に出入りし、夜は又中にもどっていた。

卵のうのカラは卵のうの袋の中に、脱皮殻は袋の外にあった。脱皮殻は約1mm。

《第4回産卵》 8月19日

8月22日 親がチョッと外に出てくる。

8月25日 卵のうの外で親が死亡。エサは前日にやったばかりだし、水もあったのだから寿命なのだろうか。卵はまだ孵化していない。

9月10日から12日 分散。分散数18匹。

その他は孵化しない卵・孵化してもそのまま死んだり他の兄弟に食われてしまったもの。

表 マミジロハエトリの産卵のまとめ

	産卵日	分散日	数	卵殻	脱皮殻	その他	産卵から分散までの日数
第1回	6月14日	7月1~2日	29匹	43	1		17から18日間
第2回	?	7月26~31日	25匹	25	33	2	?
第3回	8月1日	8月18日~20日	11匹	11	11	0	17~19日間
第4回	8月19日	9月10~12日	18匹	20	18	2	22~24日間

マミジロハエトリはいったい一生のうち何回くらい産卵し、1回には何個の卵を

産むのかと思い、観察を始めてみた。捕らえた以前に既に産卵している可能性があるので不十分な記録しか取れなかったが、いくつかのことが分った。

産卵の周期は約 2.5 週間で前の卵が孵化し、子グモが卵のうを透かして確認できるようになった頃、次の産卵をする。

また、親は産卵すると、卵のうの中に入ったきりで、数日間は飲まず食わずで過ごす。親が外に出てくるようになると孵化した気配が感じられる。孵化するまではじっと卵を守っているのだろう。

脱皮殻数から卵のう内で一回脱皮することが分った。しかし、虹色の脱皮殻のような卵殻も幾つかあった。

1 回の産卵数（10～30 個）、孵化日数（17～24 日）も産卵の初めと終わりでは少し変化してくるようだ。

（クモの世界第 6 号，1979 年 11 月 11 日発行，3～4 頁より）

[コメント] マミジロハエトリは普通種ですが、きちんとした記録は意外に少ないため、このような産卵の記録は貴重です。記事では第 1 回の分散数が 20 と 29 と違っていますが、原稿をボールペン原紙に起こすときに誤記した可能性があります。文脈からは 29 が正しいようです。（池田）